



第 6 号
平成 27 年盛夏
発行
真龍山大雄寺
北見市留辺薬町宮下町 109
TEL 0157-42-2418
FAX 0157-42-2748

住職挨拶

早いもので今年もお盆の時期となりました。今年度は以前よりお知らせしている通り、お寺の様々な事業が動き出します。皆様にはご寄付等、ご協力頂き感謝の限りでございます。

皆様のご家庭に一軒一軒お話をする中で感じたのは、家族の形というのも時代と共に多様性が出て来たという事です。昔のように長男が家業を継いで、両親の老後の面倒も診ると言うのは逆に今では珍しくなってきたのかもしれませんが。その中で、両親・ご先祖の供養もその家庭の形に合わせなければならぬ状況になり、今まで通りという訳にはいかならなくなってきました。それぞれの家庭にとって何が最善か考える事は、私達にとってもこれからの大きな課題と言えらるのだと思います。

この度の大事業もそれら様々な要望に出来るべく、始まったものでもあります。檀信徒皆様の心の拠り所となる「お寺」、そしてそこに集う「家族」の形をもう一度、築き上げていけるようにと決意を新たに

する所でもあります。

禅の言葉に「喫茶去きつさき」という

言葉があります。「まあ、お茶でも飲んで一服」と言ったところでしょうか。このような時代だからこそ歩む足を止めて、一息付いて周りを見渡してみる。そういう心の余裕というのが大事になってくるんだろうと思います。

合掌



昭和 10 年頃の庫裡

お寺の動き

秋彼岸会特別コンサート

平成二十六年九月二十三日、例年の秋彼岸会法要を行い、終わって引き続き「北海道歌旅座」様を招いて、昭和歌謡コンサートをいたしました。お参り以外にもお寺に足を運んでもらいたい、という事で、数年前より始めた行事の一環の一つ。メインボーカルのジュンコさんを中心に、ダンサー六人が華を添えた。当日は入場無料で檀信徒以外の方にも案内したので、百人以上の参加となり、「真つ赤な太陽」「青春時代」など昔懐かしの曲を皆で口ずさみ、大いに盛り上がりました。

留辺薬の「大雄寺」本堂でライブ



昭和のヒット曲をみんなで歌い懐かしむ

「平成 26 年 9 月 26 日 伝書鳩掲載」

大雄寺行事予定

- 8 月 16 日 孟蘭盆施食会
新亡施食会 午前 11 時より
一般施食会 午前 11 時半より
- 9 月 23 日 秋彼岸会 午後 1 時より
- 10 月 17 日 成道会 正午 12 時より
・ 11 時頃より昼食が出ます。
・ 御本山布教師様の御話しが御座います。
- 3 月 21 日 春彼岸会 午後 1 時より
又は 20 日

平成二十六年年度役員・世話人

住職	米田憲人	世話人	安藤祐太郎(上町)
総代	戸田健司(大富)	世話人	佐川和則(旭南)
世話人	小熊正三(旭中央)	世話人	渋谷恒彦(秋田)
全	佐々木勝太郎(豊金)	全	工藤良二(宮下)
全	木幡和清(旭中央)	全(監査)	荒木正憲(旭一区)
全	吉村義正(北見市)	全(監査)	尾関昭夫(北見市)
全	井上勝昭(旭三区)		

境内整備・会館庫裡改築 進捗状況

記帳額 (297 人記帳)
7 2 3 1 万円

納入額
4 5 0 1 万円

平成 27 年 7 月 1 日現在

仏事

Q & A

知ってるつもりでも、わからないことが多い仏教用語・作法もあるようです。そこで Q & A のコーナーを設けました。

Q 今回、庫裡が新しくなれば、お寺でお葬式が出来るようになると耳にしたんですが？

A 私達のお寺も平成五年ぐらまではお寺で葬儀をしておりました。ただ最近では会館等も出来て、またそちらの方が利用しやすい事もあって、今ではほとんどお寺は利用しておりません。ただ葬儀の規模も段々小さくなってきて、地域の方の手伝いも難しいという事で、いわゆる「家族葬」で済まされる方も多くなってきました。そこでこの度の事業の大きな目標の一つであった、お寺で葬儀を担える環境を整えれば、より皆さんの希望に添った葬儀が出来るかと思えます。もちろん完璧な受け入れ態勢を作るにはまだまだ時間と費用がかかりますが、お寺で葬儀をする事が一番の布教化であるのは間違いなく、次の世代へと繋げていくためにも必要であろうと切に望みます。



心のたすき

「感謝の心を持ちながら」

上町 脇 太二男



妻が亡くなってから早いもので七か月が過ぎ、間もなく初盆を迎えます。

亡妻の姉に、一年間は「仏様を守って自粛」をするように言われ、体調の悪さと悲しさ・寂しさもあり、今日

まで自堕落な毎日を送っていました。そんな時、住職より原稿依頼を頂きましたが、こんな状況を打破するために、あえて筆を取ることになりました。

妻が最初に発症したのは乳癌で二年半前、そして一年前には脳腫瘍が見つかり道東脳神経外科病院で手術を受けました。その後、入院を繰り返していましたが、昨年の八月からは入院加療が必要な状態になってしまいました。

妻は、時には宿直もある厳しい仕事を持ちながら養子となる二人の息子を育ててくれました。私が四十一歳の時、脳腫瘍になり旭川医大で手術を受けるなど、心労の掛けっぱなしでした。

だから、今度は「俺が面倒をみる番」と張り切って看病に通いました。病院に行つて最初にすることは軽く顔の手入れを手伝うことでしたが、自分では出来なくなつてからは、私が乳液やリップクリームをつけてやることも喜び、意識が薄れるようになってからも唇をつぼめて意思表示してくれました。

担当の医師からは「奇跡的な回復力」と言われたこともあり、もしかしてと思っていました。私が想像していたよりも早い他界となつてしまふ「恩返し」の出来る時間が足りなかった」のが残念でなりません。これからは妻の写真を持つて、記念の言葉が彫つてある下川町の「万里の長城」など、二人で行つた思い出の地を「感謝の心を持ちながら」訪ね歩きたいと思っています。

永代観音開眼供養

平成二十六年八月、境内に建設中であつた永代供養塔が完成し、その開眼（魂入れ）供養を執り行いました。将来、ご先祖のお骨の守り手がいないという声も多くなつてきまして、代わりに私達（お寺）が管理・供養をする永代供養をお願いされる方も多くなつてきました。今回、合同の供養塔が完成した事で皆さんが将来の事に憂慮せず、安心して手を合せて頂けるものと思っております。



編集後記

▼ 今年も相変わらず締め切り近くならないとエンジンかからないのは悪い癖であります。お寺の建物も年数が経つてきて、修繕が必要な所が次から次へと出てきて頭が痛い状況です（苦笑）。歴代住職達も同じような悩みを乗り越えて来たんだろうなあ、と自分を奮い立たせている毎日です。（住職）